



吉本隆明全著作集

2

初期詩篇

I

勁草書房

吉本隆明全著作集 2

昭和四三年一〇月二〇日第一刷発行
昭和五〇年二月二〇日第九刷発行

著 者 吉本隆明

発行者 井村寿二

発行所 勁草書房

〔東京都文京区後楽二の二三の一五
電話番号東京(〇三)八一四局六八六
一 郵便番号一一二 振替口座東京
一七五二五三番〕

印刷所 精興社

製本所 青木製本

*定価は外函に表示してあります。

© 1968 by Takaki Yoshimoto

目

次

呼子と北風

.....三

北風

四

フランス語回顧

八

呼子

四

山の挿話

一〇

岡本かの子へ（りんね）

六

詩稿

IV

.....二

大樹

三

永訣

二〇

老工夫

三

赤い合羽

二〇

旅唱

三

降誕

三

童子像

四

夜番

三

童子像

四

夜番

三

夜番

六

幼年

三

麦熟期

七

劇場

四

夜番

六

黄樹

四

夜番

六

レモン

五

夜番

九

恋譜連抄

五

風
走れわが馬

二六 二毛

旅
虚空

二六 二毛

かなしきいこひに

二六

かなしきいこひに

二六

吹く風の秋のごとくに

二六

またのいこひに

二六

石碑

二六

晩秋

二六

人間

二六

哀歌

二六

告別

二六

秋

二六

氷雨幻想

二六

卑心

二六

風雅

二六

河原

二六

在家

二六

夢

二六

宗祖

二六

苦行

二六

ぼんやりと

二六

寂しき日に

二六

黄昏に

二六

高地

二六

白日の旅から

二六

緑の幕情

夕霧

古式の恋慕

夕映えの様式

雪映え

暁の卑屈

華幻

打鐘の時

芥河

回帰の幻想

林間の春

日々の偏奇

少年期

青桐

荒天

雪崩

道心

冬の炎

告訣

時計

不遇の使節

八

七

六

五

四

三

二

一

〇

九

八

七

六

五

四

三

二

一

〇

九

雨烟のなかにて

習作

エビキユルの園

放浪

反徒の学校

習作

習作

緋の夕映え

地主

X嬢に

暗像

呼び子

絵画館

祈り

峠

梅花

冷たい曇り日の陰

反響

沈丁花の幻想

花の色

告訣

二六

二五

二四

二三

二二

二一

二〇

一九

一八

一七

一六

一五

一四

一三

一二

一一

一〇

九

八

七

残照篇

また少女に

二三

梨原

二七

さすらひ

二五

少女

二六

(遙かなる雲にありても)

二六

寂しい化粧

二九

歩行者

二七

神よ

二九

遅雪

二七

悔悟

二九

島影

二九

願ひ

二〇

春の枯樹

二三

反吐

二四

春の炎

二三

(いつまでも消えなかつた)

二四

銀の樹木

二三

渦動

二四

魚紋

二三

(苦しい夜がある)

二四

氷のうへ

二四

訣別

二四

影との対話

二五

(苦しくても己れの歌を唱へ)

二四

雀

二五

薄明

二五

禱歌

二五

春の内部

二六

習作

二七

(とほい昔のひとが住んでゐる)

二七

善

二五

午前

二五

革まる季節

二五

理神の独白

二五

二九

通信
 回帰
 残照
 悪の童話
 列島の民のための歌
 重工業
 暁
 堀割
 昔の歌
 出発
 触手
 夜の国

二五 日の終末
 二六 長駟
 二七 前夜
 二八 夢
 二九 凱歌
 三〇 雨期
 三一 眼の夏の時
 三二 街
 三三 傷手
 三四 地の果て
 三五 忍辱

七
 七
 七
 八
 八
 八
 九
 九
 一〇
 一〇
 一〇

日時計篇(上)

.....

〈日時計〉
 〈時間の頌〉
 〈歌曲詩習作稿〉
 〈暗い時圏〉
 秋の狂乱

二二 虫譜
 二三 〈暗い日に充ちた〉
 二四 詩への贈答
 二五 暗鬱と季節
 二六 睡りの造型

一九
 一九
 二〇
 二〇
 二〇
 二一
 二一
 二二
 二二
 二二

〈暗い招き〉	二八
季節	二七
泡立ち	二九
〈亡失風景〉	三〇
秋の深い底の歌	三三
〈日本の空の下には〉	三五
秋の予感	二六
〈わたしのはころは秋を感じた〉	三八
〈倦怠〉	三〇
〈風の雅歌〉	三三
〈海への街の記憶〉	三三
〈青の季節〉	三三
〈老いたる予感〉	三三
路上	三五
〈思ひ出と赤い日〉	三六
風過	三六
秋の残像	三九
〈韻のない独奏曲〉	三〇
〈緑から黄にかけての叙情〉	三三
〈辛い風景〉	三三
〈亡失〉	三四

〈少女にまつはること〉	二八
○光のうたとその歌	二七
〈並んでゆく蹄の音のやうに〉	二九
〈骨と魂とがゆきつく果て〉	三〇
影のうちに在るものの歌	三三
〈空洞〉	三三
〈雲のなかの水塊〉	三五
〈ひとつの季節〉	二六
〈祈りは今日もひくい〉	三八
〈秋のアリア〉	三〇
〈孤独といふこと〉	三三
〈木の実座遺聞〉	三三
〈寂しい路〉	三三
〈秋風はどこから〉	三五
〈過去と現在の歌〉	三六
〈晩禱の歌〉	三六
〈一九五〇年秋〉	三九
○規劃された時のなかで	三〇
〈風と光と影の歌〉	三三
〈寂かな光の集積層で〉	三三
〈駈けてゆく炎の歌〉	三六

〈さいの河原〉	二七	〈荒天〉	二五
〈罪びとの歌〉	二六	〈戸外からの光の歌〉	二四
〈意匠の影のしたに〉	二五	〈独白〉	二五
〈抽象せられた史劇の序歌〉	二五	〈海の子たちの歌〉	二六
〈晨の歌〉	二五	〈褐色をした落葉の記〉	二六
〈風の明りの歌〉	二五	〈わたしたちのうへに夜がきたと きの歌〉	二九
〈ゆふぐれといつしよに唱ふ歌〉	二五	〈暗鬱なる季節〉	三〇
〈曲り路〉	二六	〈仮定された船歌〉	三〇
〈虔ましい時〉	二七	〈誘惑者〉	三〇
〈秋雷の夜の歌〉	二八	〈寂かな歩みの歌〉	三〇
〈夜の歌〉	二九	〈行手の歌〉	三〇
〈夕はいつまでも在った〉	二九	〈記憶が花のやうに充ちた夜の歌〉	三六
〈黄いろい河水に沿つて〉	三〇	〈微光の時に〉	三〇
〈鳥獣の歌〉	三〇	〈寂かである時〉	三〇
〈緑色のある暮景〉	三〇	〈触手〉	三〇
〈風の離別の歌〉	三〇	〈徒弟の歌〉	三〇
〈晩秋の歌〉	三〇	〈晩秋永眠〉	三〇
〈幸せの歌〉	三〇	〈希望の歌〉	三〇
〈黙示〉	三〇	〈十一月の晨の歌〉	三〇
〈擬牧歌〉	三〇	〈太陰の歌〉	三〇
〈至近の時のもとに〉	三〇		

〈むしろ遠い禍ひを願ひ〉	三六	〈晚い秋の歌〉	三三
〈湿地帯〉	三八	〈風枯れる夕べの歌〉	三三
〈晩光の時に〉	三九	〈晩に風が刺した時〉	三三
〈忘却の歌〉	三〇	〈時間の頌歌〉	三六
〈風が睡る歌〉	三三	希望の歌	三八
〈建築の歌〉	三三	〈冬がやつてきたとき仲間うた ふ歌〉	三九
〈神のない真昼の歌〉	三四	〈わたしたちの囁きの歌〉	三〇
〈雲が眠入る間の歌〉	三五	〈雑感の歌〉	三三
〈午後〉	三六	〈暗い構図〉	三五
〈酸えた日差のしたで〉	三七	〈独りでゐるときにうたふ歌〉	三五
〈死霊のうた〉	三八	〈風のある風景〉	三六
〈鎮魂歌〉	三〇	〈わたしたちが葬ふときの歌〉	三七
〈蒼馬のやうな雲〉	三一	〈われらのとしは過ぎてゆく〉	三八
〈B館附近〉	三三	〈視えない街のこと〉	三九
〈睡りの歌〉	三四	〈或る晴れた日の歌〉	三〇
〈寂寥〉	三五	〈薄明の歌〉	三一
〈地の果て〉	三六	〈逝く者のための歌〉	三三
〈斜光の時に〉	三七	〈冬の時代〉	三四
〈掟の歌〉	三八	〈遠くのものに与へる童話〉	三五
〈運河のある都会の歌〉	三九	〈メリー・クリスマス〉	三六
〈変貌〉	四〇		

解
題

〈降誕祭〉	三六	〈悪霊の歌〉	三七
〈夕雲とひととの歌〉	三六	〈冬がきたとき仲間たちの唱ふ歌〉	三七
〈冬の日差しの歌〉	三六	〈冬風のなかの建築の歌〉	三七
〈寂しい街衢の歌〉	三七	〈夕べは暗い〉	三〇
〈寂寥のなかに在る日の歌〉	三七	〈落日の歌〉	三二
〈暗い冬の歌〉	三七	〈ひとつあるわたしの在処の歌〉	三三
〈寂かな予感〉	三五	〈死にいたる歌〉	三四

初期詩篇 I

吉本隆明全著作集

2

呼子と北風